



石狩医師会  
はまなす医院

工藤立史

パイプオルガン（以下オルガン）の音色を直接耳にする機会は意外に少ないかもしれない。それでも結婚式の際にチャペルで演奏されることもあれば、Kitaraのような公共音楽ホールで耳にすることもあろう。だが、オルガンの演奏経験者ともなると、その数は極めて少ないのではなかろうか。

私が初めてオルガンに出会ったのは1998年、北大在学中のことだった。キャンパス内のクラーク会館にオルガンがあることを友人から聞き、その楽器を演奏する学生団体“北大オルガン研究会”があることに驚き、興味をそそられるまま、さっそく入会に至った。幼少から高校までピアノを習っていたこともあって、同じ鍵盤楽器であるオルガンへの抵抗は少なく、スムーズに入り込むことができた。しかし、実際に触れてみると、鍵盤を押したときの感触はまるで違い、少なからず戸惑いがあった。それもそのはず、音の出る原理がピアノと全く違っていたのである。ピアノは鍵盤を押してハンマーが弦を打つことにより音が出るのだが、オルガンはたくさんのパイプに空気を流すことで音が出る。パイプというのは、一本一本がリコーダーのような笛の集まりと考えてよく、鍵盤を押すと鳴らしたいパイプへ風が通る。この仕組みをもじって、サークルの仲間は、オルガン練習のことを“風通し”と呼んでいるが、大規模なオルガンでは最長のパイプは64フィート（約20m）にもなり、鍵盤を押してから音が出るまでに若干のタイムラグが生じるため、まさに風が通っていることを実感するのである。

さらに、最もオルガンがピアノと違う点は、足鍵盤が付いているところである。手鍵盤のみならず足鍵盤でもメロディーを奏でるため、めまぐるしく両足が動きまわる。私自身、四肢を操って演奏を習得するのは至難の業だった。ピアノをはじめとした鍵盤楽器は脳を活性化するといわれており、オルガン演奏は足を動かす分、ピアノにも増して脳が鍛えられるはずである。学生時代に私の脳もそれなりに活性化はしたが、今に至って全く実感はない。

オルガンを始めたことで札幌コンサートホール（Kitara）の専属オルガン奏者と交流する夢のようなことが実現し、ドイツ留学中の日本人オルガン演奏家とも知り合いになって、ブレイメンで教会オルガンを弾かせていただく機会にも恵まれた。今とな

っては良い思い出となっている（写真）。

北大のオルガンは道内では北星学園大学に続いて2番目に古い。パイプの本数は1,556本で、Kitaraに次ぐ規模を誇っている。日本における国立総合大学のオルガンは、東京大学教養学部のオルガンと合わせて2台しかなく、大変ユニークな存在である。1966年、北大の創基80年を記念してクラーク会館が作られることになったときに、当時学長だった杉野目晴貞先生が、「これからの総合大学は学問の場であると同時に教養文化人として芸術を愛する者を育てる場所である」という理念を持ち、北大創基80周年記念会館建設期成会からの寄贈という形で、オルガンの設置を実現した。当時のお金で1,080万円かかっている。しかし、ミッション系大学でもない北大になぜオルガンが設置されたのか、当時の学長がすでに他界されているということもあり、詳細不明な点が多い。1980年代以降は公共音楽ホールにオルガンが設置されることが珍しくなくなったが、北大はその先駆けだったと言ってよいだろう。

目下、私はマイホームを新築中であるが、そこに一念発起して本物のオルガンを置くことにした。一般にオルガンのサイズは家庭に入る小さなものからコンサートホールに設置する巨大なものまで千差万別で、建物の規模に合わせてオーダーメイドで製作される。私が購入するものは小規模のものだが、一般の建造物と同様、設計図に従って何度も設計士と打ち合わせをしてイメージするものを作り上げる。オルガン製作を英語ではbuild（建設）と言うほどであり、まさに住宅に匹敵する手間暇がかかるのである。

折しも、今まさに私の医院でも大規模な増改築工事を行っているところであり、医院、住宅、そしてオルガンまで3つの建築を同時進行させている。おそらくこのような経験は人生において最初で最後だろう。決して安い買い物ではないが、メンテナンスを怠らなければオルガンの寿命は何十年、何百年にも及ぶため、コストパフォーマンスは優れている。“風通し”をよく行い、末永くオルガンを演奏し、同時に職場や家庭内の風通しにもつなげていきたいと考えている。

